

## 『根馬氏系図家譜正統』の記録「年数久遠而勉職位階生卒不詳」を考える ～「仲宗根豊見親 目黒盛五代の孫」への問題提起として～

下地 利幸（宮古郷土史研究会会員）

はじめに

『根馬氏系図家譜正統』の「序文」は、根馬伊嘉利（目黒盛豊見親の孫、真角与那盤の二男）が仙女に導かれて異界（龍宮界）を訪問する龍宮説話で彩られた不思議を伝える記録となっている。孝心深い伊嘉利はその龍宮界で龍王から先祖供養の歌舞（鼓祢入祭）を授けられて帰り、これより当地の鼓祢入祭は始まったと記している。

龍王から授けられて始まったとされる先祖祭の法式「鼓祢入祭」については『雍正旧記』も、

外間御嶽男神祢間大按司 根間津のかワらと唱う

右由来、元祖根間大按司、其の子祢間津のかワら、其の子目黒盛、其の子真角与那盤、其の子普佐盛五人の墓所にて子孫相揃い祭り上げ候処、普佐盛弟伊かりと申す人龍宮界より先祖祭りの法式鼓祢りと申す祭りを授かり参り候付、墓所圍い、草木ヲ植へ御嶽に仕成し、鼓祢りの祭り之有り、中古迄は祭り候事

と記し、またこの条に続いて「鼓祢里祭の事」を記して、祢間伊かりの龍宮界訪問と鼓祢里祭の由来を詳しく伝えている。

『雍正旧記』が編さんされたのは1727（雍正5）年で、首里王府が宮古・八重山に家譜の修譜を許したのが1729（雍正7）年のことで、それから25年後の1754（乾隆19）年に与那覇勢頭豊見親を祖とする白川氏家譜の修譜が成って、根馬氏家譜もおそらくこの年以降の成立であろうとされているから、『雍正旧記』が編さんされた1727（雍正5）年時点にあって、根馬伊嘉利が仙女に導かれて異界（龍宮界）を訪問し龍王から先祖供養の歌舞（鼓祢入祭）を授けられたとする異界訪問説話が外間御嶽由来伝承として伝えられていたのであろう。（ちなみに『雍正旧記』に先行する『御嶽由来記<1705～7年、宮古各嶽の祭神とその由来を記す>』には何故か外間御嶽の記述はなく、鼓祢入祭の由来も記述されていない。）

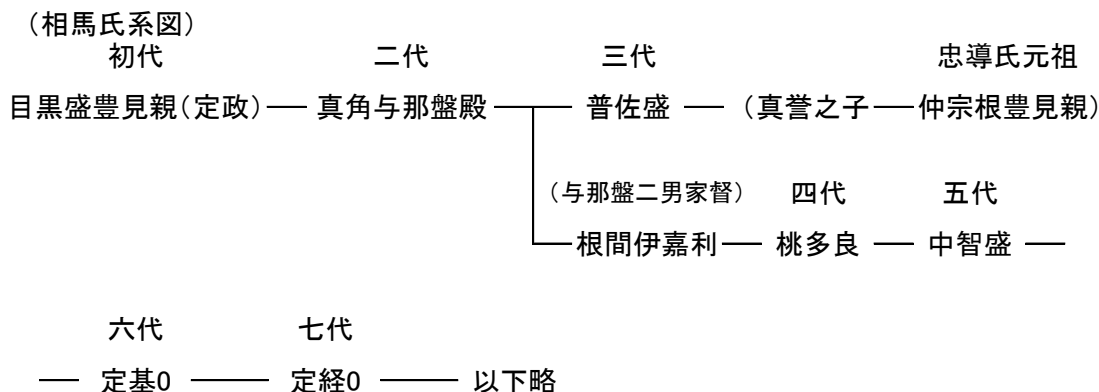
『根馬氏系図家譜正統』の「序文」は家譜の編さんにあたって『雍正旧記』の先の記録を「序」としてそのまま取り込んでいったものか、あるいはまた家譜の編さん時にあっても伊嘉利の異界（龍宮界）訪問譚が、外間御嶽の由来を説く伝承（氏族伝承）として語られてもいたのであれば、旧記の記録とこの氏族伝承とを重ね合わせてなった「序文」だったものな

のかも知れない。

本稿では、述べてきたように根馬伊嘉利が仙女に導かれて異界（龍宮界）を訪問し龍王から先祖供養の歌舞（鼓祢入祭）を授けられたとする記録と、また同じく「序」にあって本稿の表題にのせた「年数久遠にて勉職位階生卒不詳」の記録とを仲宗根豊見親とのかかわり（旧記類が記す「根間目黒盛五代の孫 仲宗根豊見親童名空広」）で考えて見ることにする。

## 1 『根馬氏系図家譜正統』の「序」

ここに吾が始祖根馬大按司の来由を尋ねるに父母何人たるを知らず、大按司息男根馬角嘉和良天大の大氏、同人一子目黒盛、これは目の上に北斗の黒痣有るを以てこの名とするなり、母は西銘嘉播親の長女思免娥、これ則ち孝女為るなり、目黒盛幼稚の時父母雙亡す、これに因って伯父根馬の大氏に有年養われると、目黒盛七歳の頃に至るも蹙りて歩行ならず、一日奴僕に罵られ辱められて勃然と躍り起き、これより行歩自（在）を得ると、成人するに随い仁徳の長者と為る、庶民始はこれを父母と慕い、ついには目黒盛豊見親と称え、これを尊んで一島の主長と為すなり、嫡子真角与那盤、母は白川根志瑠殿の一女孟仁依なり、与那盤殿二男家督根馬伊嘉利は天性孝順にて、父の喪に居りて思慕切なり、墓所に慮り、三年涕泣して休寝せず慮る、時に父夢に天川崎に於いて甦生す、驚き起きて往ってこれを見る、恠しきかな俄かに泉湧き出て長さ七、八尺計りの髪毛二、三根、これを得るや忽然と仙女一人出で現われこれを乞い取る、伊嘉利無心にてこれを与えて帰す、翌日天川に往きて又仙女に逢う、女の曰く、（伊嘉利の）孝心深き事龍宮界に聞ゆ、龍王殊にこれを嘉み妾を使わし君を導くなり、帰り去り往て王命に応えよと、伊嘉利これに従い海中に入る、立地す金殿玉楼、光輝恰も上界の風景に似る、龍王曰く、汝の孝心に感じ天地動き、吾が海中皆これを憐れむ、此の界に鼓祢入祭りの歌舞有り、墓所に於いてこれを奏せば、即ち先祖上天の福有って子孫繁昌の慶びなり、これに於いて三月、この翌に龍王曰く、汝の舞樂成熟す、早や帰去し、三年三月齋戒精進にてこれを奏せば如在と為すなりと、伊嘉利恩を謝して殿門を出るや忽然として天川崎に帰出す、龍宮界の三ヶ月は陽間の三年なり、これより當地の鼓祢入祭りは始まるなり、伊嘉利嫡子桃多良、其の嫡子中智盛、年数久遠にて勉職位階生卒不詳、其の嫡子川平首里大屋子定基、是れ即ち根馬氏の系祖為るなり。



「伊嘉利嫡子桃多良、其の嫡子中智盛、年数久遠にて勉職位階生卒不詳」、四代桃多良、五代中智盛、真誉之子が普佐盛の嫡子であれば、桃多良と真誉之子は従兄弟、中智盛と仲宗根豊見親は又従兄弟の関係にあたる。この二人（桃多良・中智盛）を家譜「序」は「年数久遠にて勉職位階生卒不詳」と記録している。（根馬伊嘉利は龍宮界から先祖供養の鼓祢入祭を授かり、祭りを始めたその人として重きを以て家譜「序」に記録されたものか。）

## 2 根馬伊嘉利が主宰する外間御嶽の祭祀

「元祖根間大按司、其の子祢間津のかワら、其の子目黒盛、其の子真角与那盤、其の子普佐盛」五人の霊を祀る外間御嶽、伊嘉利（真角与那盤二男、普佐盛の弟）はそこで龍宮界から授けられた先祖供養の鼓祢里祭りを執り行う。先祖の霊を慰め、供養して、島の豊穰と子孫繁栄を願う祭祀を伊嘉利が執り行う、このことは何を意味するものだろうか、祭祀権の継承、すなわち根間の大按司を元祖とする根馬氏宗家の家督を伊嘉利が受け継いだ（受け継いでいく）そのことを現わすものでもあったように思われる。根馬氏家譜序は「与那盤殿二男家督根馬伊嘉利」と記している。

### ○鼓祢里祭りの事（『雍正旧記』）

（前半略）・・・鼓祢いりの祭ヲ授け申し候、此の時龍宮仰せられ候は、此の祭り拾三年廻りニ壹度九月之内先祖所にて祭り候得ば、天地之願い御加護にて先祖の霊神ハ上天仕り、島豊ニ子孫繁栄これ有る可べ候間、怠る間敷く由し御教え御座候付、有難く謹みて礼拝仕り、御暇乞い申上げ候処、即ち件之女に導かれ夢の心地に天川崎に出で候、龍宮界にて三日と存じ候得は此の世にてハ三年罷り成り候、即ち活命の心地にて家に立ち帰り、一門中相揃い歎び之情を伸べ、伝受之通り根所ニ神人数ハ弍拾五人、其の内伊かりハ真ん中ニ臺ニ居り、西

方に向へ白鷺（鷺）の鳥の尾羽長さ壹尺以上の者貫き連ね冠に仕、白衣を着て名蔵双紙を唱え得は、式拾四人のものともハ庭鳥の尾羽を貫き連ね冠に仕、紺朝を着て伊かりを立ち圍へ、伊かりか詞を請ミ節毎に表し拍子を揃えて鼓を打ち十三日祭り始め、其の旧跡を以て中古迄祭り申し候事。

附白ばしの鳥の尾羽の儀、祭り之年期ニは必ず當島北方白川浜へ寄せ來為る由伝へ候

※外間御嶽で先祖供養の祭祀を主宰する祢間伊かり、拾三年廻に一度の祭りの年に白川浜に寄せ來る白ばしの鳥の尾羽、このことも西銘の嘉播親（鯖祖氏祖、目黒盛豊見親の外戚・祖父）が白川浜（こすくあか）の難にあつて鯖（龍宮界の氏神）に救助されて白川浜へ無事に帰り着いた、その鯖祖氏（また目黒盛豊見親）の正統な後継者が誰であったのかを暗に知らしめるもののようにも思われる。

根馬氏家譜 正統

定基川平首里大屋子

童名生卒不詳

父目黒盛豊見親定政五代中智盛

母不知何人

昔年為川平首里大屋子任八重山島守護職

宇座盛定経

父定政六代川平首里大屋子定基

「年数久遠にて勉職位階生卒不詳」と家譜序に記される四代桃多良、五代中智盛以後の代、六代定基から家譜は「父目黒盛豊見親定政五代中智盛」「父定政六代川平首里大屋子定基」と「父定政何代何々」と十四代定自まで（定自以下欠）一貫して記載される。このことも根馬氏定政（根間目黒盛）を代々正統に引き継ぐ家系（直系）であることを示す表記なのであろうと思われる。

土原氏正統（元祖土原豊見親）家譜

多良間首里大屋子春圖

童名多麻

父土原豊見親春源

多良間首里大屋子春信

童名多麻

父土原豊見親春源二代多良間首里大屋子春圖

土原氏正統家譜の表記もやはりそうで、父土原豊見親春源何代何々と表記することで、土原豊見親を元祖とする正統な家系の家譜であることを示すものであろうと思われる。

### 3 『忠導氏系図家譜正統』の「序」

夫（それ）諸家の正統は一門の綱領（根本・根源・おおもと）なり、これを詳らかに則り（示し）て支流これに従い貫き通せば平か（世の中が平和で何事もない様子、穏やか）なり、故に旧聞を尋ね當家の根源を記して備え、後世の子孫に知らしめ本の亀鑑（行動の規準、手本とすべき根本）とす、粵（ここに）吾元祖仲宗根豊見親玄雅の高祖目黒盛豊見親は、昔日根間大按司の息男根間角嘉良天大の大氏の一子なり、母は西銘の主嘉播親の長女思免娥なり、目黒盛は目の上に北斗の黒子有るを以てこの名と為すと云う、かの目黒盛仁徳の長者なるを以て、庶民これを尊び目黒盛豊見親と称え一島の主長と為すなり、目黒盛の嫡子真角与那盤殿、与那盤の嫡子普佐盛豊見親、普佐盛の嫡子真誉之子豊見親、真誉之子の嫡子は則ち元祖仲宗根豊見親玄雅なり、玄雅の母は目娥月、何人の女（むすめ）為るを知らず、生卒寿命共に詳らかならず、暫く聞く所の古伝を誌し後の識者を待つものなり。

『忠導氏系図家譜正統』の「序」、これもまた私には不思議を思わせるものがある、そのような記録となっている。（「正統・一門・支流」、「支流」とはどの系統を指しての支流なのだろうか、根馬氏をしての支流なのだろうか？）家譜の序文で普通に考えられることは、元祖（始祖）の功業を述べて、また光栄ある一門の事績を挙げて後世の子孫へ伝えていく、そのようなものに思われるのであるが、（たとえば宮古で最初に修譜された『白川氏系図家譜正統』の序は始祖与那覇勢頭豊見親の功業を述べて、「白川」を氏名乗とする由縁や「恵」を以て名乗り頭字とする由縁、与那覇勢頭豊見親が開いた本島（宮古島）の来歴などを高らかに記して光栄ある家系が後世の子孫に忘れることなく語り継がれることを願って修譜されたと記録している。）忠導氏家譜の序はどうだろうか、功業、また一門の栄光云々ではなく、「正統（忠導氏）が一門の綱領を示して支流がこれに従えば平か」なのだとして述べて、忠導氏が示す「綱領」を以って一門の平穩、結束を図ろうとするものであるかのようなものとなっている、私にはそのように読み取れる。

それと序の末尾の記載「暫く聞く所の古伝を誌し後の識者を待つものなり」、このことは序文の全体にかかるものなのだろうか、しかし普通に読めば全体ではなく「玄雅の母は目娥月、

何人の女（むすめ）為るを知らず、生卒寿命共に詳らかならず」をさしての言いであろうと思われる、この結びの言いまわしは『宮古島記事仕次』（1748年）の「序文」（在番筆者明有文長良文）の結び「是則大主かいにしをこのむの雅意を本として後の識者を待つものならず」（この文言は『宮古島記事仕次』本文全体にかかる文言だと思われる）を想起させるものがあって、忠導氏家譜の序はあるいは『宮古島記事仕次』に拠って記されたであろうことを伺わせている。（「記事仕次」は「普佐盛豊見親の嫡子真誉の子豊見親子供六人を設く、婦人ハ目娥月といふ人なり一男空広〔後に仲宗根の豊見親と称す〕云々と記している）

○『土原氏家譜正統』の「序」

それ正統は水・木に根源有るがごとし、然り則ち正統を詳らかに明かせば支流自ずからこれに従い、杼を貫き通す、吾元祖土原豊見親春源は弘治年間の人なり、其の頃八重山島大濱赤蜂兄弟及与那国の鬼虎は己の武勇を負みて王化に随わず謀叛の時、忠導氏玄雅に随き従い彼の地に到り、彼の逆徒を征罰し中山に到り奉賀にて、玄雅をして元祖春源請いねがい多良間島の主長と為って帰島す云々。

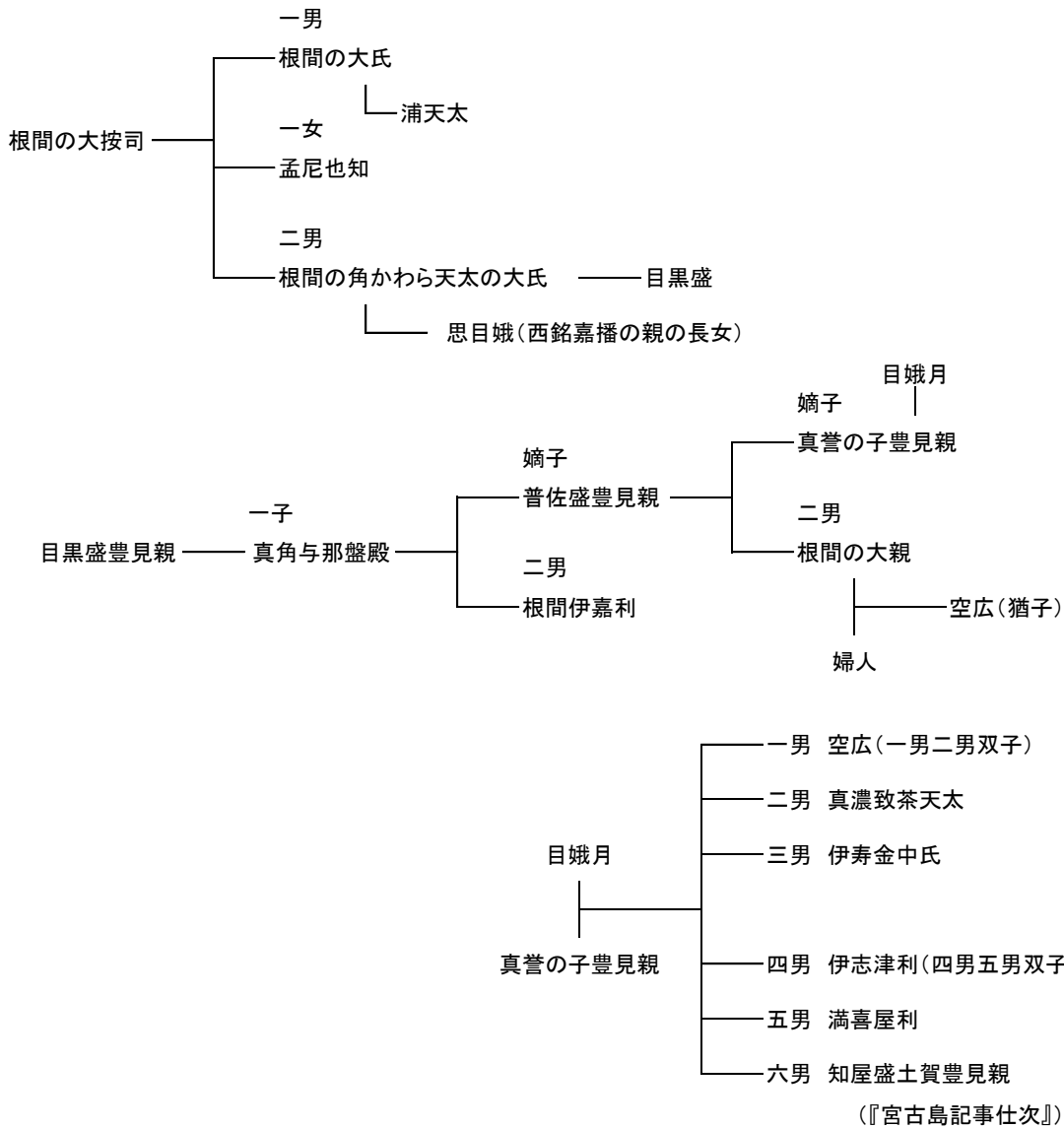
『土原氏家譜正統』の「序」は土原豊見親の功業を述べている。しかしここでも忠導氏家譜を思わせる文言が見られる。あるいは家譜「序」の記述書式としてこのような文言で表現される様式もあったものかも知れない。

忠導氏系図家譜 正統

記録

元祖玄雅仲宗根豊見親 父普佐盛豊見親の嫡子真誉の子豊見親なり

『忠導氏系図家譜正統』はその序で、忠導氏の系統を「高祖目黒盛豊見親」から説き起こす、しかしその系図家譜の記録は、云うまでもないことであるが「元祖玄雅仲宗根豊見親」から始まるものであって、「高祖目黒盛豊見親」を忠導氏家譜の記録に見ることはない。



#### 4 「年数久遠而勉職位階生卒不詳」を考える

「伊嘉利嫡子桃多良、その嫡子中智盛、年数久遠（久しく遠い事・遠い昔）にて勉職位階生卒詳らかならず」これを文字通りの意味で解していいものなのか、伊嘉利嫡子桃多良について稲村賢敷は「仲宗根豊見親八重山入の時あやご」の解説で次のように述べている。

○仲宗根豊見親八重山入の時あやご  
〔十五、大川盛与那覇むゝたらとよ〕

＜与那覇むゝたらは根間いかりの子で目黒盛豊見親の曾孫に当る、桃多良（与那覇むゝたら）祖父名継承で与那覇むゝたらと称した＞

（『宮古島旧記並史歌集解』稲村賢敷）

稲村はまた『宮古島庶民史』で桃多良と中智盛について次ぎのように述べている。

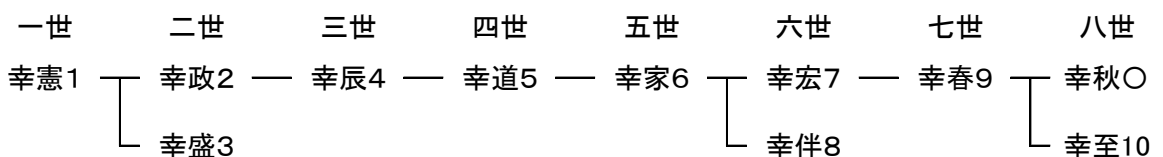
「根間伊嘉利の子を桃多良と称す。彼は仲宗根豊見親の与那国征伐のあやぐの中に『大川盛与那覇ぬむむたら』と唄われている人で、与那国征伐に参加した武将である。大川盛というのはその住居根間が藍屋井の隣になって居るためであろう。『与那覇のむむたら』というのは祖父与那盤殿を継いだものであろうから『むむたら』、すなわち桃多良がその名称である。彼は与那国征伐の功績によって重く用いられたことであろうが、これについては家譜に何の記録もない。桃多良の嫡子の中智盛と名称だけ記録されているが、その生卒及び勤職等は不明としてある」

稲村の指摘のとおりであれば、中智盛はともかくとしても桃多良についてはそれなりの記録伝承が伝えられていたということになる。

○『仲立氏系図家譜正統』に見る「年暦久遠而生卒録不詳」

城辺友利の有力者であった金志川金盛、那喜多津兄弟については、「雍正旧記」が「仲宗根豊見親八重山入の時あやこ」で「金志川の豊見親金盛とよ 城なき弟なき当ツとよ」と記録し、また「雍正旧記」「記事仕次」「忠導氏家譜」がともに二度の八重山征伐に仲宗根豊見親につき従った忠義の人と記録している。金志川城主であった金志川金盛、那喜多津（金志川豊見親）兄弟の記録は多く、くわえて「雍正旧記」は「金志川豊見親なきたつ」は正徳八年に琉球（中山）から「大般若経六百巻」を頂き子孫に伝えた有徳の人であったが「崎原カワラ」の讒言に逢って仲屋豊見親金盛（仲宗根豊見親の嫡子）に討ち果たされたと記し、また「記事仕次」も「仲屋金盛豊見親讒を信じて仁人を害す事」で、兄弟のその顛末を詳しく伝えている。

「仲立氏系図家譜正統」は、その金志川金盛、那喜多津兄弟の父「友利大殿 幸憲」を一世（元祖）として編まれている。





- 1 幸憲 友利大殿  
年曆久遠而父母及生卒不詳
- 2 幸政 金盛豊見親  
年曆久遠而生卒録不詳
- 3 幸盛 金志川豊見親  
無後胤
- 4 幸辰 宮国与人  
年曆久遠而生卒録不詳
- 5 幸道 友利船筑  
年曆久遠而生卒録不詳
- 6 幸家 仲嘉泊与人  
年曆久遠而生卒録不詳
- 7 幸宏 平安名目差  
年曆久遠而生卒録不詳
- 8 幸伴 宮国目差 大味俵 下里与人為小祖
- 9 幸春 友利船筑 宮国仁也  
年曆久遠而生卒録不詳

一世幸憲 友利大殿は「年曆久遠而父母及生卒不詳」、二世幸政 金盛豊見親は「年曆久遠而生卒録不詳」、幸盛は「無後胤」とし、三世幸辰から七世幸春までは役職名の記録はあっても全て「年曆久遠而生卒録不詳」となっている。家譜は、八世幸秋からようやく「年曆久遠而生卒録不詳」の文言が外されたかのように編まれている。

仲立氏家譜 正統

幸秋 大浦与人

童名 亀

父 友利大殿幸憲七代宮國仁也幸春

母 染地氏新里与人実頼女真辺計

崇禎十五年（1642）壬午八月十八日生

康熙十八年（1679）庚申七月二十日去 享年四十号秋月

この不可解にも思える家譜の記録について仲宗根將二氏は「・・・旧記類と同じ十七世紀

に整備されたであろう金志川兄弟に関わる「仲立氏正統系図家譜」には、ここ抄出した旧記類はもとより両先学の諸論考の世界は何一つとして記録されていないのである。初代友利幸憲は「年歴久遠而父母及生卒不詳」とし、兄弟とみなされる二代めは「幸政 金盛豊見親 年歴久遠而生卒録不詳、幸盛 金志川豊見親 無後胤」とのみある。二度にわたる八重山遠征はもとより、「大般若経六百卷」の導入、兄金盛多良間での病死（謀殺）、弟那喜多津野原岳での自刃（騙し討ち）など何もない、現代に連なる仲立家は那喜多津でなく金盛に始まるというのも奇異な感がする。

兄弟ともに当代の名家「忠導氏」元祖仲宗根豊見親と嫡子仲屋金盛に起因する非業の最期ゆえ同家への遠慮から記載を避けたのであろうか」と述懐している。（「多くの記録・伝承あるなかで『家譜』記載のない金志川兄弟」～七月定例会のあらまし～ 仲宗根將二 <「宮古郷土史研究会会報」第168号 2008,9>）

島の歴史にあつて実にもってなんとも謎めいて不可解な、そんなことを思わせる家譜の記録となっている。

○『河充氏系図家譜正統』に見る「年歴久遠而生卒勤職不詳」

河充氏家譜

真敷友利首里大屋子 童名鶴壽

父母生卒不詳

尚清王世代

嘉靖三十年辛亥七月十三日下地大佐事為洲鎌船筑后為友利首里大屋子雖然年歴久遠而生卒勤職不詳

真饒砂川親雲上童名毛差

父川満大殿末孫友利大首里大屋子真敷 母駒嘉久志平良親雲上女嘉那志生卒不詳

隆慶六年壬申五月三日生

尚寧王世代

萬曆四十一年癸丑閏八月二十九日三苜田百貫島五人スカマクチ給 御朱印 頂戴后為砂川之頭職雖然年歴久遠勤職不詳

○『土原氏家譜正統』に見る「久遠故生卒不詳」

土原氏家譜 正統

土原豊見春源

童名宇増呂

父母不知為何人子

尚真王世代

弘治年間仲宗根豊見親玄雅随従到八重山島追討（逆）徒全帰島嘉靖年間任多良間島主雖然  
久遠故生卒不詳

#### 年数久遠にて勉職位階生卒不詳

「河充氏家譜」「土原氏家譜」については、見る限りにおいてはこれを文字どおりの意味で理解していいように思われる。

「年数久遠而勉職位階生卒不詳」「年曆久遠而生卒録不詳」「年曆久遠而生卒勤職不詳」「年曆久遠勤職不詳」「久遠故生卒不詳」などの表記には、文字通り「年数（曆）久遠」で（記録や伝承が伝わらず）「不詳」の為に記載すべきものがない場合や、記録伝承のあるものは記載するがこれ以上は分からない場合などの表記として、また、記録伝承はあっても、あるなものか（その何らかの関係性）を憚ってそれを家譜に記載しない（記録に止めない）、そうした場合でもこのような表記方でもって家譜を修譜したもののように思われる。

根馬氏家譜の記録「伊嘉利嫡子桃多良、その嫡子中智盛、年数久遠にて勉職位階生卒不詳」、はたしてこれはどの場合の表記となるものだろうか、憚りがあった、私には、ほかでもなく仲宗根豊見親忠導氏に対する何らかの憚りがあったの表記だったもののように思われる。

#### 5 「仲宗根豊見親 目黒盛五代の孫」への疑問

##### 『雍正旧記』の記録

「雍正旧記」は「鼓祢里祭の事」の次に「仲宗根豊見親末孫鯖を不喰候事」の条を記して西銘村のかばにやが白川浜の沖合、城赤の干瀬で大鯖に助けられて白川浜へ無事に帰ったいきさつと、かばにやの子（男子三人、女子二人）の行く末を伝え、鯖を氏神とする来歴を伝えている。「（西銘かばにやの娘の）姉女子ハ平良村祢間てたの不ちと申す人の女房に成り、子孫繁栄致し候、このかはにやハ仲宗根豊見親外戚方の先祖にて候、この由来を以てその末孫鱻を氏神と慎み喰い申さず候」（ここでは、「このかはにやハ仲宗根豊見親外戚方の先祖」と記すのみで、仲宗根豊見親が目黒盛豊見親と直接結びつくような記述とはなっていない）。しかし同じく「雍正旧記」は、「嶋中の為メ勲功有之候人由来」の条で「根間目黒盛豊見親跡嶋主 大立大殿童名まさり 大立大殿跡嶋主根間目黒盛五代の孫 仲宗根豊見親童名空広」と記して、仲宗根豊見親を「目黒盛五代の孫」としている。

### 『宮古島記事仕次』の記録

「記事仕次」は、「西銘嘉播の親長井の里の真氏を娶事、嘉播の親子供三兄弟不孝の事」の記事に続けて「附孝女兩人父を迎し事」を記録し、その条の「附録」として「嘉播の親の長女思免娥ハ根間の大按司の二男角かはら天太の大氏の婦人なり、嫡子一男目黒盛豊見親、其の子真角與那盤殿、其の子普佐盛豊見親、其の子眞誉の子豊見親、其の子仲宗根豊見親なり、今にいたるまで其の苗裔ハふかをくらはずとなん」と記している。

また「記事仕次」は、普佐盛の二男根間の大親の婦人が空広（仲宗根豊見親）を猶子として貰うけたとも記している。

### 『忠導氏系図家譜正統』の記録

「忠導氏家譜」は、先にも記したように、「元祖仲宗根豊見親玄雅の高祖目黒盛豊見親は、昔日根間大按司の息男根間角嘉良天大の大氏の一子なり」、「目黒盛の嫡子真角与那盤殿、与那盤の嫡子普佐盛豊見親、普佐盛の嫡子眞誉の子豊見親、眞誉の子の嫡子は則ち元祖仲宗根豊見親玄雅なり」と記して、普佐盛の二男根間の大親や空広（仲宗根豊見親）猶子のことは一切記録にない。

#### <「高祖」と名乗り頭字の「玄」>

「忠導氏家譜」は、「高祖目黒盛豊見親」と記録している。「高祖」（自分から五代前の親、すなわち祖父母の祖父母）、仲宗根豊見親から五代前の祖は目黒盛豊見親、「高祖」とは仲宗根豊見親から五代前の先祖が目黒盛豊見親であることを意識しての尊称であるように思われる。

仲宗根豊見親を元祖とする忠導氏の名乗り頭字は「玄」、仲宗根豊見親玄雅は「目黒盛五代の孫」、名乗り頭字は「玄」、五代の孫は玄孫（やしゃご）、また「玄」一字で「やしゃご」（孫の孫にあたるもの）とも、忠導氏の名乗り頭字を「玄」とした由来については特に伝えられていないように思うが、これもまた仲宗根豊見親が「目黒盛五代の孫」を意識しての名乗り頭字であったように思われる。

何故これほどまでに「目黒盛五代の孫」にこだわり主張するのだろうか、仲宗根豊見親が（またその忠導氏が）「目黒盛五代の孫」に強くこだわり主張する、このことは逆にそう主張しこだわり続けねばならない立場にあった、それを仲宗根豊見親が本来の血筋としての「目黒盛五代の孫」ではなく、「猶子」として目黒盛（西銘嘉播親）の系統に入った（あるいは我が物とした）「目黒盛五代の孫」だったからだと解釈するとどうなるものだろうか。

<中智盛も目黒盛五代の孫>

中智盛もまた目黒盛五代の孫であった、私はこのことで、根馬氏家譜の記録「伊嘉利嫡子桃多良、その嫡子中智盛、年数久遠にて勉職位階生卒不詳」を考えてみたいと思っている。

仲宗根豊見親が目黒盛五代の孫であれば、他ならぬ中智盛もまた、目黒盛五代の孫なのであった。仲宗根豊見親の父、真誉之子は目黒盛四代の孫、中智盛の父、桃多良もまた同じく目黒盛四代の孫となる。目黒盛の嫡子は真角与那盤、与那盤の子は嫡子普佐盛、二男根馬伊嘉利、ここから二つの系統となって普佐盛の嫡子真誉之子、その子仲宗根豊見親、根馬伊嘉利の嫡子桃多良、その子中智盛と継がれていく、このようなことであればこれはもう言うまでもなく、真誉之子と桃多良は従兄弟、仲宗根豊見親と中智盛は又従兄弟の関係だということになる。しかし「忠導氏家譜」、「根馬氏家譜」共にそのような近い関係性を窺がわせるような記録があるようには思われないし、むしろ逆にそれぞれを全く無視するかのようになるものを感じられるものとなっている。伊嘉利が先祖供養の鼓祢入祭をおこなう外間御嶽、その外間御嶽に祀られる普佐盛（真誉之子の父）を根馬氏系図は、三代の記載欄に 普佐盛 と、ただ名を乗せるだけのみとなっている。「家督（三代）は与那盤二男根馬伊嘉利（が継いだ）」と「序」にある。

私はこの普佐盛の記録になにかしら痛ましいものを感じてしまう。先に「仲宗根豊見親が本来の血筋としての『目黒盛五代の孫』ではなく、『猶子』として目黒盛（西銘嘉播親）の系統に入った（あるいは我が物とした）『目黒盛五代の孫』だったからだ」と解釈するとどうなるものだろうか」と述べた。

<根間の大親の婦人 空広を猶子とす>

根間の大親いまた子をまうけずして卒去す、故に婦人ハこれを歎き、真誉の子豊見親の子を貰て猶子とせん事を願う、豊見親の曰く、空広、真濃茶天太二人の中より目利して猶子にせよと許す（『宮古島記事仕次』）

これは普佐盛豊見親の二男根間の大親（嫡子は空広仲宗根豊見親の父真誉の子豊見親）の婦人が空広を猶子とするくだりで、これからすると嫡子の真誉之子の子である空広を猶子とすることだから、空広は由緒正しく目黒盛五代の孫であり、婦人の猶子となってもそれは何ら変わるものものではない。

しかし、はたして真誉之子は普佐盛の嫡子だったのだろうか、根間の大親、この人もまた「記事仕次」が云うように普佐盛の二男だったのだろうか、私には、根間の大親この人こそが実に普佐盛の嫡子だったように思われる。（根間大按司から続く根間氏本宗を次ぐ名前には

根間の大氏、根間の大親などの呼称がなによりふさわしく思われる。大親〔うふうや〕、今日にあっても「うふうや」という呼称は父母の兄弟で一番上の伯父、父母の長兄を敬って呼ぶ言葉として使われている)「忠導氏家譜」は根間の大親やその婦人については全く記していない、また空広猶子のことも全くなく、そのこと自体が無かったかのようである。しかし私には、「記事仕次」が記す「空広(仲宗根豊見親)猶子」のことは何らかの形で事実あったことのように思われる。

※猶子＝兄弟、親戚、また、他人の子を自分の子としたもの。相続を目的としないで仮に結ぶ親子関係の子の称。(小学館『日本国語大辞典』)

真誉之子豊見親は根間の大親の婦人の願いをいれて、空広を大親の猶子にする。「記事仕次」には幼少の頃猶子にしたらしく「叔母賢良にして能く子を教ふ空広天性孝順にして母の教えに志たかい七歳の比より名誉をあらハせり云々」とあって、空広その七歳の頃、津やこみやの庄園で奴僕を下知した折りに「當世の主大立(里)大殿」と出会い「其形相不凡言語さハやかにして大人の風あり」と評され、大殿「是より空広を寵愛して大殿の許にて成人しける、空広十七歳の時より加和良保翁と云う人と共に大殿の撰権を聞かせめたり」と記述されている。

せっかく願い出て猶子とした根間の大親の婦人と空広との係わりはその後どうなったものなのか「記事仕次」はなにも伝えていない。

#### <津やこみやの庄園と空広>

空広は大立大殿に見いだされてやがて島主の地位にまで昇りつめる。大立大殿に見いだされる以前の空広(仲宗根豊見親)はどのようなものであったのだろうか。「記事仕次」が云うように根間の大親の婦人の猶子として養育されていたのだろうか、私はこの空広七歳の頃の庄園での奴僕の下知や大殿との出会いと逸話、そうしたものは実際の出来ごとではなく空広の「神童伝説」を生み出すために語られたものであろうことを本紀要の第19号(2015年)に「空広(仲宗根豊見親)島主に陞る ―その背景を考える―」と題した小論で述べた。また小論では空広が奴僕を下知したとされる「津やこみやの庄園」にもふれて、この庄園は元もと大殿の領地であったものを、空広が大殿の撰権となった、その頃に、大殿から空広に与えられたものではなかったかとも論じた。本稿でもそうした立場から大殿と空広の出会い、空広が大殿に見みいだされる、そのことを考えてみたいと思う。

「津やこみやの庄園」そこは大立大殿が領有する庄園であり、また大殿が中山朝貢に出向くための拠点（津・港）とする地でもあった。空広はその庄園で庄園を管理するなんらかの職にあった、私にはそのようなものに思われる。あるいはその職にあった人は空広の父親だったものかも知れない、空広は少年として父親と共に庄園に詰めてそのなんらかの働きをする、いわば大殿の使用人、そのような少年だったように思われる。そのような少年が何らかの出会いを得て大殿に見いだされ、大殿のもとでその地位を築いて行った。私は今そのように考えている。

大殿にその非凡な才能を見いだされた空広は大殿に仕えて、やがて大殿政権の中樞を担い、撰権へと登りつめる。空広は撰権として中山朝貢にかかわり、その中山朝貢の要衝の地である「津やこみや」の地（庄園・港）を管理管轄する職権をも大殿から与えられた。撰権としての中山朝貢、このことがあって空広は首里中山王府との緊密な結びつき、関係構築ができたのであろうと思われる。

大殿の死後、撰権職にあった空広は中山王府の後押しもあって、大殿の後継者である子の能知伝盛を久米島へ追いやり（能知伝盛はその久米島で病死する）一気に大殿の政権を篡奪した。こうして大殿政権を篡奪した空広は中山に上り、中山尚真王から島主に任じられ、仲宗根豊見親と称された。

#### < 島主としての正統性を保証するもの >

大殿政権を篡奪し、首里中山王府から島主に任じられた空広仲宗根豊見親、その仲宗根豊見親に島主として必然的に最も必要とされていたものがあったのだと思う。大殿政権を篡奪し島主となる、そのことの必然性、島主としてのその正統性を保証する証し、仲宗根豊見親にはそのことが最も求められていた。このことはあるいはまた中山王府から新たに島主に任じられる、そのためにも必要とされたものだったのかも知れない。それは大殿に代わる島の主長たるにふさわしい「由緒正しい血筋」、その証しを示すことであったものと思う。自らの血筋が島の主長として、また、島の正統な統治者としていかにふさわしいものであるかを中山尚真王に示す、そのことであったはずである。中山尚真王に謁して宮古島に主長に任じられた空広にとって、もっとも必要とされていたものがあった。それは島の新しい主長たるにふさわしい、その由緒正しい血筋、そのことを明らかに示すことであった。そのときにあって空広は自らの出自が島の主長として、また、島の正統な統治者として、いかにふさわしいものであったかをしっかり整えておく必要があったはずである。空広は中山尚真王に謁するにあたり、尚真王の父尚円（金丸）が第一尚氏王統を倒して新しく王朝を開くが、そのまま尚氏王統の正式な継嗣として、尚円を名乗り、中国皇帝の冊封を受けて国王に封じられた、

このことについて（あるいはまた、その尚円の父（農民出身）が後に「尚稷」の諱を追称されていたことについても）そのことを我が身に引きよせて、知識として十分に備えていたもののように思われる。

由緒正しい血筋、大殿のもとで成りあがって島主に陞った空広仲宗根豊見親にとって、唯一欠けていたものがあつたとすれば、それはまさにその「由緒正しい血筋」だったはずである。

島主となった仲宗根豊見親はその必要とされる「由緒正しい血筋」を自らのものとする必要があつた。そして大立大殿にとって代わった島主である仲宗根豊見親にもっともふさわしい「血筋」がそこにあつた。島の最初の主長と仰がれる目黒盛豊見親の系統（血筋）である。宮古（平良の根間）に最初に根を張った有力な氏族とされる根間の大按司を祖父とし、また炭焼長者として富貴栄耀をきわめ、西銘の主となった西銘の嘉播親を外祖父に持つ目黒盛豊見親、まさに島主となった仲宗根豊見親にとっては実にふさわしい「血筋」であつたはずである。

仲宗根豊見親はそれを「我が物とした」、仲宗根豊見親にはそれを「我が物とする」それだけの力の備えがあつたのであろう。仲宗根豊見親空広は猶子として普佐盛の子（嫡子？）の根間大親の猶子に、空広の父「真誉の子」は、また普佐盛その人の子（このことは形として系統・代を整えるためにされたものだったものかも知れない）として、目黒盛の系統（血筋）に入った。

#### <目黒盛五代の孫へのこだわり>

かくて仲宗根豊見親は目黒盛五代の孫として、その「血筋」を自らのものとした、力を持ってそのことを成しとげた、しかしことはそう単純だったようには思われないものがある。仲宗根豊見親は「鯖祖氏」を氏名乗りとしている、「鯖祖氏」は目黒盛豊見親の外祖父西銘の嘉播親に由来する氏名乗りとして知られている、根間の大按司を始祖とする目黒盛系統は「根馬氏」である。「根間目黒盛五代の孫」として目黒盛の系統に押し入った仲宗根豊見親であつたが、しかしその本宗直系が名乗る氏名乗り「根間氏」を得ることはさすがにできなかったものように思われる、また本宗直系であれば引き継いでいくであろう祭祀権の継承、このことも当然かなわなかつた。始祖根間の大按司から五人の霊を祀る外間御嶽の祭祀権は鼓祢入祭りを執り行つた根間伊嘉利がその氏名乗り「根馬氏」とともに引き継いでいった。

しかし、あるいはまた島の主長となった仲宗根豊見親にとって「根馬氏」とか、その宗家としての「祭祀権」だとか、そうしたものはもともと必要としなかつたし、求めもしなかつたということなのかも知れない、このこともまた充分考えられることである。仲宗根豊見親



が必要としたものとは根間目黒盛を直系とする五代の孫としての、その証しであったからである。その証しとしての「鯖祖氏」、仲宗根豊見親は目黒盛五代の孫の、その証しとして目黒盛豊見親の外祖父西銘の嘉播親に由来する「鯖祖氏」を自らの氏名乗とした。このことでもって「仲宗根豊見親 根間目黒盛五代の孫」は、もはや明らかに成就したであろうからである。(仲宗根豊見親は「忠導氏」を名乗る以前は、西銘の嘉播親を祖とする「鯖祖氏」を名乗っていた、このことは中山王府の正史『球陽』(1743～45年)の記録によって知られている。『球陽』(「沖縄文化史料集成5、球陽 読み下し編」)は尚真王代の記事の中で仲宗根豊見親のことを「宮古山の鯖祖氏仲宗根豊見親玄雅」、「宮古山の鯖祖氏玄雅」、「鯖祖氏豊見親玄雅」「今の鯖祖氏仲宗根豊見親玄雅」などと記録し、仲宗根豊見親がその「鯖祖氏」を名乗る由縁(西銘の嘉播親の古伝)までも詳しく記録している。)

そうしたことであれば成就した「仲宗根豊見親 根間目黒盛五代の孫」を当然のこととして人々に知らしめるためには、仲宗根豊見親が(またその鯖祖氏・忠導氏)が「目黒盛五代の孫」に強いこだわりを持ってことあるごとにそう主張し言い続ける、そうすることで「目黒盛五代の孫」として、当然のことのごとくに人々がそう思い受け入れていく、旧記類や忠導氏家譜がくり返し記録する「仲宗根豊見親 根間目黒盛五代の孫」の記事は、私にはそのようなものに思われる。

仲宗根豊見親が「根間目黒盛五代の孫」に強いこだわりを持ってことあるごとにそう主張したのであれば、このことで一方ではまた沈黙を強いられるものがあつた、「仲宗根豊見親 根間目黒盛五代の孫」を憚っての沈黙、記録に止めることを憚って黙して語らない沈黙、このことが根馬氏家譜の記録「伊嘉利嫡子桃多良、その嫡子中智盛、年数久遠にて勉職位階生卒不詳」なのであろうと思う。くり返しになるが、仲宗根豊見親が目黒盛五代の孫であれば、他ならぬ中智盛もまた、まさしく正統な目黒盛五代の孫なのであつた。仲宗根豊見親の父、真誉之子は目黒盛四代の孫、中智盛の父、桃多良もまた同じく目黒盛四代の孫となる。島主として時の権勢を誇る仲宗根豊見親が由緒正しく「根間目黒盛五代の孫」なのだと言えれば、本来の孫であるはずの桃多良、中智盛にとって、もはやその立場は無きに等しく沈黙する以外にとるべくものはなかつたのであろう。

<「刷り込み」効果を思わせるような>

旧記類や忠導氏家譜がくり返し記録する「仲宗根豊見親 目黒盛五代の孫」の記事は人々にそう思わせるための「刷り込み」効果を思わせるような、なにかしらそのようなものが感じられないでもない。

## 6 龍宮界からもたらされた先祖供養の「鼓祢里祭」

外間御嶽は「元祖根間大按司、其の子祢間津のかワら、其の子目黒盛、其の子真角与那盤、其の子普佐盛五人の墓所」、その墓所を、龍宮界より先祖供養の鼓祢入祭りを授かってきた伊かりが、御嶽に仕立て先祖供養と子孫の繁栄を願う「鼓祢入祭」を執り行った。

目黒盛の外祖父西銘の嘉播親（龍宮界の神・鯖を氏神と崇める鯖祖氏の祖）が仲宗根豊見親の祖（鯖祖氏）として普佐盛の代から（普佐盛の祖父の目黒盛は高祖として）仲宗根豊見親へと移される、このことで普佐盛に代わって家督を継いだであろう根間の伊嘉利が、家督を継ぐにあたって、先ずなにより先にやらなければならなかつたことは、こうした一連の出来事を先祖の霊に報告し供養をする、伊嘉利が家督（祭祀権）を継ぐ、このこともまた告知らせ許しを乞うことで子孫繁栄を願う、こうした祭りをとり行うことであつたはずである。このために先祖代々の墓所が御嶽に仕立てられて、先祖供養の法式として龍宮界から授かつた鼓祢入祭りが伊嘉利によって始められた。

拾三年廻りに一度の祭りの年に伊嘉利が身につける「白鷺の鳥の尾羽」は西銘の嘉播親の故地、白川浜に（龍宮界から）寄せてくる、このことも鼓祢里祭りが鯖祖氏の祖である西銘の嘉播親を象徴的に祀る先祖供養の祭りであることを思わせている。

ところがここに一つの奇異なことに気付かされるものがあつた。この外間御嶽には真誉の子の父普佐盛の霊もまた祀られているということである。伊嘉利が墓所を御嶽に仕立て、鼓祢里祭りを執り行ったこのときには伊嘉利の兄の普佐盛もまた亡くなって外間御嶽に祀られていた、『雍正旧記』の「外間御嶽男神祢間大按司 根間津のかワらと唱」の条はそう伝えている。このことをどう理解すればよいものなか、普佐盛が「真誉の子の父」として仲宗根豊見親の系統に取りこまれる、根間氏宗家のまさにその困難な危機的状況の中で先祖供養の祭りとして、鼓祢里祭りが普佐盛の弟伊嘉利によって始められたものであれば、普佐盛は亡くなった後で、もの言わぬ身としてそのことを引き受けたのだろうか、そういえば普佐盛の子の根間の大親、この人もまた子をもうけずに亡くなった、大親の婦人はこれを歎いて、真誉の子に願いでて空広を猶子に貰うけたのであつた。

普佐盛は亡くなった後に、真誉の子を、我が嫡子真誉の子として受け入れた、普佐盛の子の根間大親（普佐盛の実の嫡子に思われることは先に述べた。）もまた亡くなった後で、その婦人によって空広を猶子として真誉の子から貰うけた、このようなことがあつたものなのだろうか。あるいはまた普佐盛、根間の大親父子にあっては、もはや共に亡くなつていた、この事でこのようなこともまた起こり得た、あり得たものなのだろうか。

<伝説としての「真誉の子」>

空広の父の「真誉の子」、これを「記事仕次」は「この子（真誉の子）誕生の時、大いなる猫来りて赤子の側に踞て片時も去らず、外間へう為（初）立の時も彼の猫先立てまいりしゆへに字をまよの子と名つけたりとそ、猫をまよと唱へハなり云々」と伝えている。実に奇妙というか不思議な猫であり、名前ではある。しかしまた、「真誉の子」がそうした猫の不思議な行動に因んだ字名なのであれば、それはそのまま「猫の子（まゆぬふっふぁ）」であって然るべきもののように思うのだが、何故にそうではなく「真誉の子」なのだろうか、「猫の子」に絡んだ当て字としての「真誉の子」、そうであればこれは偉大な仲宗根豊見親（空広）を生み育てて世に送り出した、その父親を称えて名づけられた当て字としての「真誉の子」だったのであろうか。

「記事仕次」が記す猫の不思議な行動、それはまるで赤子を慈しみそのすこやかな成長を見守るかのようである。名とする「真誉の子（猫の子）」が、そうした猫の不思議な行動に因んだ字名なのであれば、このことは猫そのものの子育てに起因する習性、その習性を空広の父である「まよの子」に見たてた、このことでもって言いだされ名づけられた字名であったものかも知れない、私にはどうもそのように思われる。猫は子を産んだその最初の場所にそのまま居着いて子育てするのではなく、外敵から子を守るためなのか、子が親離れするまでに何回か場所を移す（巣をさらえる）習性があるといわれている。ひと所に落ち着かないで転々と居場所を変えることを、宮古では「猫ぬ、子を（まゆぬ、ふっふぁを）さらえるよう」だと云うようである。

「猫の子（まゆぬ、ふっふぁ）」の子「空広」、その空広を、親である「猫の子」は出生地のいずこからか（あるいはそこは仲宗根の地だったのかも知れない）引き移って（巣をさらえて）「津やこみやの庄園」に身を寄せた、このことでやがては空広の道が大きく開いて行く、空広はそこで大立大殿に見いだされ、「津やこみやの庄園」から大殿の許（居宅）に引きとられ（二度目の巣さらえ）て成人し、撰権職を得て島主となるまでに登りつめる、島主となった空広はその力をもって「鱈祖氏・根間目黒盛五代の孫」を自からのものとし、父「猫の子」（その霊をともなっか）とともに再び生地である仲宗根・外間の地にもどり、そこで「仲宗根豊見親」と称される。

おそらくは農民の出で、何らかの理由があって流浪の身となったであろう父の「真誉の子（猫の子）」が、そのような定まらない境遇にあって猫の子育てのように拠りどころを転々としながら空広を育てあげた（あるいはまた空広自身が押し開いてきたこうした道があったということなのかも知れない、私にはそれこそ、空広自身がその「猫の子<真誉の子>そのものだったようにも思われるものがある）、このことが背景にあって、それが猫の子育てをする

習性に仮託されて、いつしか（あるいは意識的にか）そのようなものとして語られ伝えられた。空広仲宗根豊見親の父が名とする「猫の子（まゆぬふっふあ）」の、「まゆぬふっふあ」たる由縁をこのようなものとして考えてみた。

○普佐盛豊見親の愁い「鬱気」は何を意味するものなのか

「普佐盛豊見親齢七十の頃、婦人偕老同穴のかたらいをそむき世を去り給ひしかハ、普佐盛豊見親深くこれを歎き寝食ともにやすからず、真誉の子豊見親天性孝順にして定省の勤めおこたらざるに、かかる御有様をみてさらにやすからず、昼夜心をつくして保養すといへとも愁い（鬱気）を解くに術なし」（「記事仕次」）

苦悩する普佐盛豊見親（深い嘆き、愁い、解けない鬱気）、普佐盛豊見親は婦人が亡くなったことで深くこれを歎き、真誉の子が昼夜の保養をつくすにかかわらず愁い（鬱気）がいよいよ深まるばかりであった。真誉の子豊見親がどうしたものかと案じ煩っていたところ、ある人から、しかるべく婦人を嫁がせて身のまわりの世話をさせれば鬱気もおのずから解けるだろうと云われ、狩俣村の婦人を迎え嫁がせたところ、月日重ねる中で亡くした婦人の面影も忘れ、二人の娘も設けた、普佐盛豊見親は無病息災にして父祖の寿命にならい百二十歳にして卒した。

偕老同穴の婦人を亡くせばそういうことも起こり得るであろうが、しかしいま一つそんなものだろうかという思いを拭いきれない。普佐盛豊見親の深い嘆き、愁い、解けない鬱気とはもっと別の要因から起因するもののように私には思われる。目黒盛豊見親の孫である普佐盛に生じた最大の困難があった、その困難に直面しての歎き、愁い、そこから生じた解けない鬱気、このように考えれば先に記した普佐盛のおかれた立場そのものとして理解することができるように思われる。

しかし先に記したとおりであれば、この時にはもうすでに普佐盛は亡くなって外間御嶽に祀られていることになっている、その普佐盛を「記事仕次」は先に記したように真誉の子の献身的孝養があつて「普佐盛豊見親（鬱気もとけて）無病息災にして父祖の寿命にならい百二十歳にして卒した」と記している。このことはしかし私には、普佐盛が真誉の子を嫡子として受け入れた（あるいは受け入れさせられた）このことで愁いを深くしたであろう普佐盛（その霊）に対して真誉之子が（また空広仲宗根豊見親が）、最大な供養を行ない愁い（鬱気）を解いていったとする、そのことがこのような形で表現され伝えられたもののようにも思われる。

おわりに

仲宗根豊見親は「忠導氏」を名乗る以前は「鯖祖氏」を名乗っていた、このことは『球陽』の記録によって知られている、『球陽』の記録によれば仲宗根豊見親は嘉靖元年（1522年）の宝剣・宝玉献上までは「鯖祖氏」を名乗っていた。その「鯖祖氏」は仲宗根豊見親が、中山王府から新たに島主に任じられる、そのために是非にも必要とされて「我がものとした」ものなのであれば、「忠導氏」これもまた仲宗根豊見親に是非にも必要とされて新たに名乗られたものであったように思われる。仲宗根豊見親は嫡子の仲屋金盛が引き起こした「野原岳の変」の、その咎めを受けて王府に宝剣・宝玉を献上し忠節を誓う、その二心なき証しとして自らの氏名乗りも「鯖祖氏」に代えて「忠導氏」とした。

「鯖祖氏」が是非にも必要とされて「我がものとした」ものなのであれば、それはまた別の新たな必要が生じたのであれば、このことでまた、その是非とする別のものにとって代られる、仲宗根豊見親にとって「鯖祖氏」とはそのようなものであったように思われる。

仲宗根豊見親は宮古島が生んだ一代の英雄だった。高良倉吉は『琉球の時代』（1980年）で第二尚氏王朝を開いた金丸（尚円王）を「名もない百姓から身を起し天下人となった、いわば琉球版太閤秀吉ともいうべき存在」だと云っている。私はそれにならない宮古島の主長となった空広（仲宗根豊見親）もまた「名もない百姓から身をおこし天下人となった、いわば宮古版太閤秀吉ともいうべき存在」だったのではないかと考えている。

空広は少年の頃は、大立大殿が領地とする「津やこみやの庄園」、その庄園に父親とともに身を寄せて何らかの百姓働きをしていた、いわば大殿の使用人、そのような少年ではなかったかということ本文で述べてきた。「津やこみやの庄園」が述べてきたように大殿の領地だったのであれば、空広少年のそのような姿は充分に実体として想い浮かぶように思われるがどうだろうか、私は今そのように考えている。空広仲宗根豊見親をこうした人物だったと見立て、「目黒盛五代の孫」や「鯖祖氏」、また「鼓祢里祭」のことなどを考え、本稿をまとめてみた。

